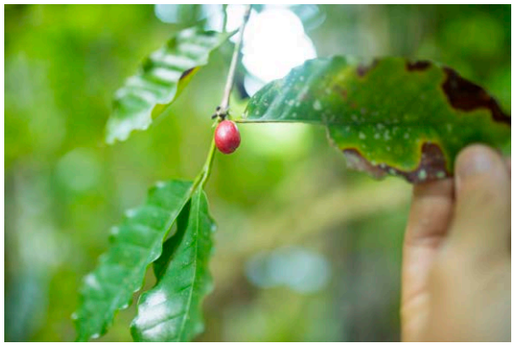
Coffee & Miracles

ROTA BLUE COFFEEと「7つのミラクル」

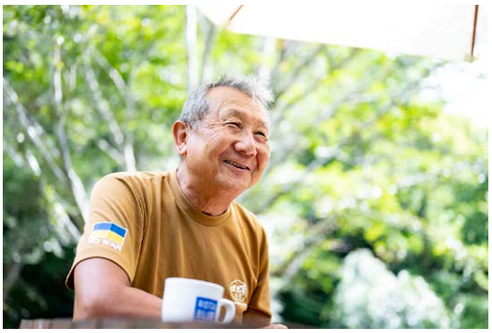
伝説の楽園レース「ロタブルートライアスロン」の生みの親、大西喜代一さんが、ロタ島の山中に見出した伝承のフォレストコーヒーと、その香りが引き寄せた「7つの奇跡」

写真＝小野口健太　*Photographs by Kenta Onoguchi*



写真上／太平洋戦争末期の戦火を逃れ、太古の姿を残したロタ島のジャングル。ここに伝承のコーヒーが息づく

同左／見たことはないけれど、それは山の中にある――。島でその存在が語り継がれてきたフォレストコーヒー



大西喜代一 *Kiyokazu Onishi*

KFCトライアスロンクラブ代表。国内外でトライアスロンやトレラン、ロードサイクリングなどの企画・運営を多数手がける。1994年にゼロから立ち上げたロタブルートライアスロンは、2017年（23回大会）を最後に休止した後も「伝説の楽園トライアスロン」として語り継がれ、復活開催が待ち望まれている。1951年、兵庫生まれ。

日中は、水深50mあるところでも、白砂の海底の砂紋がくっきり見える。ロタの海の透明度と明るさは「世界一クリアなスイムコース」として語り草となっている

伝説の楽園トライアスロンと伝承のフォレストコーヒー

KFCトライアスロンクラブと、その代表、大西喜代一さんが、北マリアナにある小さな島、ロタ島に見出したフォレストコーヒー「ロタブルーコーヒー」をめぐる、いくつかの奇跡。

そのうちのひとつは、大西さん率いるKFCとロタ島との出会いにあった。1993年、参加予定だったタヒチ国際トライアスロン大会がムルロア環礁での核実験の影響で急遽、中止となり、その代わりに訪れたロタ島で、大西さんは、その美しいロケーションに魅せられ、「ここでトライアスロン大会を開催しよう」とひらめく。

そして、初めて訪れた異国の島で、大会主催の経験もなかった大西さんが、ゼロから、本当にトライアスロン大会を立ち上げてしまう。これが翌94年に始まり23回続いた「ロタブルートライアスロン」だ。空を飛んでいるような錯覚を覚えるほどクリアで明るい海を泳ぎ、濃密なジャングルに囲まれた道を走る、そのロケーションの素晴らしさに加え、純朴で楽しい島の人々とKFCが作り上げた親密で心地よい空気に満ちたそのレースは、今や伝説化しているほどの人気大会だった。

しかし、その奇跡の産物は、世界の大きな流れに翻弄され、消えてしまう。「20数年間、大会を続けたけど、その間に世界の動きとか、いろんなことが重なって、どんどん落ちてくるわけよ、島の景気が。SARS、9・11同時多発テロにリーマンショック、もう毎年のように何かあるわけや。トライアスロンで観光振興いうても、ちょっと盛り上がるのは大会のときだけ。人の気持ちは盛り上がるけど、それにしてもこれはもうあかんなと」（大西さん）

島への定期的な航空路線もなくなり、一時はチャーター便を飛ばして、大会を継続したが、世界を覆ったコロナ禍に、とどめを刺される格好で、トライアスロン大会どころか、ロタ島の経済自体が、どん底まで落ち込む。

ロタの人々と家族のように付き合ってきた大西さんは考え抜き、そこでふたたび奇跡的な発想の跳躍を見せる。「島の経済復興には農業や水産業しかない……で、思い出した。島にはコーヒーがあったな。それやったらええんちゃうかと。もうホンマに勘やったけど、これは何かあるなと」

大西さんは、そうした自分の勘には自信があった。20数年前、初めて訪れた縁もゆかりもないロタ島で、「トライアスロン大会をできる！」と瞬間的に思ったのも、その勘によるものだった。

そして、その勘はまた、大西さんがロタ島と出会った頃、20数年前のある記憶にも紐づいていた。1994年、トライアスロン大会の準備で島を訪ねた際、現地で親しくなった島民の家で、ふるまわれた、一杯のコーヒーの味だ。「元々、ロタとかサイパンあたりは、麦茶みたいな、うっすーいコーヒーしか

内外のレースを楽しんでいた大西さん。「トライアスロンは南の島がよく似合う」常々そう感じていた

ない。でも、そのとき飲んだコーヒーは、明らかに味が違うから、『これおいしいやん！』と言うたら、それはもう自分とこに植えたやつを焙煎して淹れた自家製やと。『へぇー、コーヒーなんか採れんねや』と感心はしたものの、あとはもう大会の準備やなんやに追われて、ずーっと20数年、忘れていた」

しかし、その後、頻繁に行き来する中で、ロタ島にコーヒーをめぐる伝承があることは、何となく見知っていた。

「見たことはないけど山の中にあるとか、おじいちゃんに聞いたことがあるとか言うやつもおったし、家の軒先にはコーヒーの木が1本ぐらいあって、浜辺にも1本の木に5～6個やけど実がなってるのを見たこともあった」

「ロタバックス会議」とスペイン文献

早速、村のリーダーたちを集めた大西さんは、まずはその伝承のコーヒーを探してみようと提案した。

「最初は、みんな『そんなん、ありえへん』という反応やったけど、もうこれしかないんやから、1回探してみようと。ロタでは、ずっと俺がいろんなことをやっきて、トライアスロンをはじめ、言ったことは全部実現してきた。その実績があるから、みんな、むげにはできない。最後は、20年来の付き合いになる市長が、山を管理する国土天然資源局にその仕事を振ってくれた。で、そんとき出席者のひとりが『大西さん、こんどはロタバックスすんの？』言うて、みんな笑った。ワーッと盛り上がって、じゃあまぁ試しにやってみようということになった」

大西さんは、この話し合いを、「ロタバックス会議」と呼び、島で「ロタコーヒープロジェクト」が動き出した、最初の大きな一歩だったと振り返る。

その後、スペイン統治時代の文献が発見され、かつて島でコーヒーが栽培されていたとの記述があったことから、島民たちも俄然やる気になった。

「山の中に群生する野生のコーヒーが見つかったのが、その年の6月。ロタバックス会議から、ちょうど1年後くらい。8月に現地へ行き、山に入ったら、まだ青いけれども、たくさんの実がなっていた。これはすごいなと」

興奮冷めやらぬ中、大西さんが次にアプローチしたのがUCC（上島珈琲）。ロタ島で発見されたコーヒーについて、専門家の見立てが欲しかった。

「なんのコネもないから、ウェブサイトのお客様相談窓口にメールで問い合わせた。そしたら、そのメールを農事調査室に回してくれた。そこでつながった中平（尚己）さん（農事調査室長）も最初は断るつもりだったらしいけど（笑）。全部詳しく説明して、ロタ島へ視察に行ってもらった」

ロタ島に自生するコーヒーの実を見た中平さんは、大いに驚いたそうだ。

「これは素晴らしい！と。海のそばに野生のコーヒーがあるのは珍しいけれど、本物のコーヒーだと。葉っぱを見たらわかるらしく、これはスペインが大航海時代に持ち込んだコーヒーではなくハワイにもある日本が持ち込んだアラビカ種のコーヒーじゃないかとも」

その後、関連する文献を調べたところ、ハワイから栽培目的でコーヒーを持ってきて、サイパンで植えて、ロタ島にも「今後、植える予定」だという記述が残っていた。また、中平さんが手配したフランスの検査機関での遺伝子検査（DNA鑑定）でも、それを裏付ける結果が出た。

そこからはUCCのサポートを得て、農場の整備や苗木からの栽培も着々と進行。昨年8月にはロタ政府と同社の間で、コーヒー栽培に関する技術指導についてアドバイザリー契約が締結され、大西さんの勘に始まりロタバックス会議で動き出したプロジェクトは、ロタ島経済復興に向けた希望の光として、いよいよ輝きを増している。

この「ロタブルーコーヒー」をめぐるストーリーは昨年、大西さんの手によってノンフィクション作品『ROTA BLUE COFFEE トライアスロンクラ

ROTA BLUE COFFEE

トライアスロンクラブが作った南の島のコーヒー農園

（大西喜代一 著／Lumina Books 刊）

大西さんが「ロタブルーコーヒー」をめぐる6つの奇跡をめぐるストーリーを綴ったノンフィクション。グルマン世界料理本大賞SOUTH PACIFIC BOOKS部門グランプリ受賞作。Amazon.comでペーパーバック、電子版販売中。

世界で唯一の料理本賞で栄誉ある部門賞を受賞した『ROTA BLUE COFFEE』。最近も、賞を主宰するコアントローさんから、「11月にサウジアラビアでグランプリ受賞者だけを集めたプレゼンの場を設けるから来ないか？」とのお誘いがあったとか。「忙しくて行けないけど、こんどまた続編を出したら、よろしくと返信しておいたよ」（大西さん）

KFCトライアスロンクラブの活動拠点「成木ガーデン」（東京・青梅）。大西さんが次なる作戦を練る、創作の場でもある

グルマン世界料理本大賞の授賞式。賞を主宰するのは、名前と同じフランス産リキュールをつくるコアントロー家の当主

ブが作った南の島のコーヒー農園』としてまとめられ、日本語版・英語版の書籍として刊行された。大西さんは、同書の中で、このプロジェクトが実現したのは、次の「6つの奇跡」によるもので、どれかひとつでも欠けていたら今はなかったとしている。

【6つの奇跡】

1つ目は、太平洋戦争末期（1944年）に米軍の集中砲火を浴びなかったこと。集中砲火を浴びていたら、ロタ島は焦土と化し、太古の森と共に野生コーヒーの木は焼失しただろう。

2つ目は、1993年に開催予定の「第3回タヒチ国際トライアスロン大会」が急きょ中止になったこと。もし開催されていれば、我々とロタ島との出会いはなかった。

3つ目は、1994年に大西がたまたまロタ島民宅で1杯の自家製コーヒーをご馳走になったこと。この出来事がなければ、24年後の2017年に「ロタコーヒープロジェクト」を思いつくことは決してなかった。

4つ目は、ロタ島で野生コーヒーの群生地を発見したこと。デビットたちが「やる時はやる、チャモロ」の真骨頂を発揮しなければ、奇跡の大発見はなかった。

5つ目は、UCC上島珈琲（株）の技術協力を得られたこと。大西のメールに真摯に対応してもらったことに感謝だ。全くの畑違いであるトライアスロンクラブの戯言としてとらえられてしまえば、その後の展開はなかっただろう。

6つ目は、世界中を震撼させた新型コロナウィルスの出現だ。これによって観光が唯一の産業であるロタ島への観光客はゼロとなり、経済は完全に死んでしまった。片や、ロタコーヒーは新型コロナウィルスどこ吹く風ですくすくと育っていた。この相反する光景がロタ市長をして、早急に「ロタコーヒープロジェクト」で経済復活の活路を見出そうと決心させたのだ。

――（前掲書より抜粋）

2022年1月に刊行された同書は、TVやラジオ、新聞などで、このコーヒープロジェクトが取り上げられるガイダンスとして、ひと役買うことになり、続いて英語圏11カ国で刊行された英語版が、もうひとつの奇跡を引き寄せることになる。

「料理本のアカデミー賞」とも言われるグルマン世界料理本大賞のSOUTH PACIFIC BOOKS部門でグランプリを受賞したのだ。

この賞は、これまで日本でも著名なシェフや料理研究家らが受賞しているが、そのほとんどが著者や刊行元の自薦応募によるものだという。そんな中、大西さんの本は、主宰者の目に留まっての受賞というレアケースだった。

「日本国内では、グルマン賞は自薦されたものだけだという誤解があった。でも実際にはコアントローさんら主催者も常にアンテナを張っていて、おもしろいものは自分たちでも探しているという。今回のように、英語版刊行1カ月後という短期間のうちに彼のアンテナに引っかかったのは、すごいこと」

授賞式は5月24日、スウェーデンのウメオで開催された。

「現地で聞いたところ、コアントローさんが一番面白い思うたんは、やっぱりトライアスロンクラブがこれをやったところ。これがビジネスパーソンのやったことだったら面白くない。コーヒーについてもド素人のトライアスロンクラブがやったところが面白いと」

授賞式でスピーチを終えた大西さんを手招きし、コアントローさんが最後に言った一言が、実にふるっている。

「ね、7つ目のミラクルがおきたでしょう？　奇跡の数は6つより、7つのほうがいい」